

2020年7月NHK北海道地方放送番組審議会

7月のNHK北海道地方放送番組審議会は、15日(水)、NHK札幌拠点放送局において、10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、北海道スペシャル「検証 茨戸アカシアハイツ～“介護崩壊”は防げなかったのか～」をはじめとして、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、8月の番組編成の説明と、放送番組モニター報告、視聴者意向報告があり、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	山下 徹也	((株)グローバル経営センター 代表取締役専務)
副委員長	蛭田亜紗子	(小説家)
委員	今村 江穂	(認定NPO法人子どもと文化のひろば ふれいおん・とから 理事長)
	桐生 宇優	(北雄ラッキー(株) 代表取締役社長)
	倉本ひと恵	(オホーツクベーグル 代表)
	齋藤 拓也	(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授)
	成田 正夫	(ながぬま農業協同組合 代表理事組合長)
	西村 卓也	(北海道新聞社 論説副主幹)
	船山 大介	(特定非営利活動法人 No Limits 理事長)
	村田 博	((株)村田商店 代表取締役)

(主な発言)

<北海道スペシャル

「検証 茨戸アカシアハイツ～“介護崩壊”は防げなかったのか～」

(総合 7月10日(金))について>

- 茨戸アカシアハイツについて、最初に亡くなった方の家族が「家庭のように温かい施設だった」と言うのを聞いて、とてもいい施設なのだと感じた。そして、介護統括の鈴木幸恵さんの「みとらざるをえなかったというのは職員にもかわいそうなことをした」ということばに、身につまされる思いがした。ただ、職員が感染して職場を離脱していく中、当施設では新型コロナウイルスに対する知識がどの程度あったのかと

いう点が見えなかった。また、当施設の現場の状況が、札幌市の縦割りの対応によって市のそれぞれの部署の担当者になかなか伝わらなかったことなども分かった。これから札幌市は人員調整の整備もしっかりやっていきたいということだが、行政と現場はワンチームでしっかりと対策をし、いつどこで何が起きるか分からない状況に備えなければならないと思った。

- 施設の中で起きていたことや問題点がとてもよく分かるいい番組だった。施設の職員が涙ながらに語る姿は、非常に心に訴えるものがあった。最初の感染者が出てから感染がどのように広がっていったのかという様子も、施設の館内図による説明で分かりやすかった。茨戸アカシアハイツの現場は完全に崩壊しており、“介護と医療の同時崩壊”ということばで結論づけたのは的確だった。施設の情報を一元化する態勢が整っていなかったという札幌市の対応は非常に大きな課題として残ったので、感染者の早期発見や初動対応をするには誰が何をすべきなのかといった今後の対応を、番組としてより明確に提言できればなおよかった。同じようなことが全国各地の病院で起きているのではないかと思うので、この番組を北海道のローカルで終わらせるのはもったいない。今後もこういった報道を続けてほしい。
- 以前にも地震災害の際の札幌市の対応のまずさが注目されたことがあったが、あのときの反省が何もできていないと感じた。民間企業では最悪の状況を想定して危機管理をするが、札幌市はそれができておらず、当事者意識に欠けていると感じた。NHKには行政の問題点を取り上げてほしい。もっと踏み込んで追及してもよかったとも思うが、この番組では公共メディアとしての使命、役割を十分果たしたのではないかと思う。患者の家族が「家族のように温かい施設だった」と語るシーンや、番組のラストで施設の運営法人の常務理事が「新型コロナウイルスクラスター終息宣言」を発表し、職員に声をかけねぎらうシーンなどからは施設のよさが伝わり印象的だった。
- なすすべなく新型コロナウイルスの感染拡大に巻き込まれた施設の実態が切実に伝わってきて、感染症対策や高齢者の介護問題について考えさせられた。感染者に接触する施設職員の防護服が薄いビニールエプロンで、リスクと隣り合わせで介護していたという実態にまず驚いた。施設側が繰り返し病院に感染者の入院を依頼しているのに、介護が必要という理由で入院を拒まれたというのは理解に苦しむし、札幌市から納体袋の提供を申し入れてきたという話には非常に憤りを覚え、命の選別がされたのではないかと衝撃を受けた。札幌市の責任者が「市の受け入れ態勢が崩壊するおそれがあった」と施設に感染し亡くなった入所者のみとりを担わせた背景を明らかにしたことはとても重要であり、今回のような感染症の拡大に対する医療体制が脆弱だったということを視聴者に印象づけたのではないか。厚生労働省DMA T事務局から赤

星昂己医師が派遣されたことで札幌市の縦割りによる連携不足などの対応策を検討する段階に入ったが、すでに施設内で12人の死者が出てしまったことが非常に残念だった。だが、札幌市が人材確保に向けた取り組みや明らかになった課題への対応策を打ち出したことを確認できた。介護統括の鈴木さんや看護課長の佐藤千春さんのことばから、現場の実情が随所に浮き彫りにされており、職員の無念さもひしひしと感じられた。この施設に起きたことを無意味にしないように全国に発信して、これからの高齢者の介護・福祉の課題を継続的に取り上げてほしい。

- 介護の厳しい実態と、介護現場で感染者が増えていった様子が時系列で紹介されており大変分かりやすかったが、亡くなられた方の家族だけではなく、ほかの入所者の家族の思いも知りたかった。また、最初の感染者がどのようなルートで感染したのかも知りたかった。現場で従事していた介護統括と看護課長の話からは、入所者のために少ない人数の中でさまざまなリスクと闘っており、まさに戦場といえる状況だったということが伝わったし、聞き取り調査の資料からは非常に緊迫感が伝わってきた。そして、赤星医師が札幌市に施設の状況を把握し、報告をしなければ行政の対応が改善されなかったということに憤りを強く感じた。札幌市の縦割り行政が図解で説明されており、施設がどこに訴えていいのかが分からないということも分かった。ただし番組を見ていると意図的ではないのだろうが、札幌市側のインタビューが言いわけに聞こえてしまい、市の不手際に最もスポットが当たってしまっているのではないかと感じた。その後、茨戸アカシアハイツを運営する法人が講習会を開いたり、札幌市も人材確保の枠組み作りや現場での対策本部の設置について検討を始めたなど、全国の前例となるような取り組みも紹介されていたので、ぜひ全国へ向けて放送してほしい。

(NHK側)

全国に同様の課題を抱えた施設は多いので、そうした施設で新型コロナウイルスの感染がまん延すると、一気に危機的な状況になるということを伝えたかった。全国放送についても検討している。

- これまでニュースなどの断片的な情報から、茨戸アカシアハイツで新型コロナウイルスの感染拡大が広がっているのは知っており、現場は何をしているのかという疑問を持っていたが、この番組で、現場の崩壊が起きた理由を改めて知ることができた。ただ、札幌市へのインタビューは、縦割り行政がこういう結果を招いたという作りになっていたが、本当にそうだったのだろうか。札幌市の担当者たちもなんとかしようとしていたと思うので、「縦割り」ということばだけで済まされる問題ではなかった

と思う。一方で、施設の方たちが札幌市から受けた対応については、とても怒りを感じた。番組全体として、札幌市への追及が少し甘かったのではないかという印象を受けたが、全国放送する価値は十分にある番組だと感じた。

- 具体的な勤務表や聞き取り調査の資料など視覚に訴える映像が効果的に挿入されていて、現場の壮絶さを分かりやすく伝えており、丁寧に取材を行っているという印象を受けた。そして、誰かを悪者にするのではなく、新型コロナウイルスの感染拡大にどう対処していくべきかという冷静な取材姿勢がうかがえた。89人の入所者を1人で担当していた看護師の佐藤さんや、休むことなく入所者の介護に取り組んだ鈴木さんのことは非常に心に響いた。札幌市の情報共有不足や初動の遅れが原因だろうと受け止めた人が多いのではないかと思うが、札幌市側も相当な混乱が生じていた中、急きよ態勢を整えたと思像できるので、市側の状況も取材して伝えたほうがよかった。集団感染の原因と対策を取り上げる一方で、入所家族のコメントから介護現場の厳しい現実も伝わってきた。いろいろな要因が複雑に絡み合っ、今回の集団感染が起きたのだと感じた。
- ニュースでは集団感染が起きている場として茨戸アカシアハイツの名前が何度も取り上げられていたが、施設の中で何が起きているのかが全く見えなかったため、今回この番組で詳しく知ることができて非常によかった。施設の特徴、入所者数、感染者数、死者数のデータを分かりやすく説明しており、介護と医療の態勢が同時に機能しなくなっていた実態や、感染者が入院できずに施設に留め置かれてしまった背景、そして家族への情報提供の不足などの問題点が丁寧に説明されていた。「何があったのか知りたい」という家族の気持ちに応える視点からたくさんの方にインタビューをしたことで、それぞれの立場がどのような問題点を抱えていたのか、またそれぞれが抱える苦悩もよく分かった。日本では医療崩壊は起きていないとされているが、今回のケースでは札幌市のほかの病院を機能させるために、茨戸アカシアハイツの入所者や職員がある意味で犠牲になっていた。医療崩壊は起きているという認識を持ったほうがいいのではないか。また、こういうときに要介護者という弱い立場の人にしわ寄せが行ってしまっている状況がはっきりと可視化されたこともとても衝撃だった。今回の一連の問題は、全国的な問題として考えるべきものだと思う。
- 施設職員の話を中心に当時の茨戸アカシアハイツの実態を知ると、想像以上に悲惨な状況にあったことが分かり、引き込まれて視聴した。最初に亡くなった89歳の女性の生前の写真や遺族の話からは、感染者数や死亡者数という数字はただの数字ではなく、一人一人の人間であるということを改めて思い出させてくれた。遺族や現場の職員からの率直な意見は、とても貴重だった。介護は一人一人のひたむきな労働に

よって支えられている仕事ではあるが、あまりにも個人の責任感や頑張りに依存しており、今回に限らず介護業界全体の問題でもあると感じた。札幌市の縦割り行政による連携不足が被害を拡大させた要因の一つであるということが分かった一方で、運営していた法人としては何をしていたのか、横のつながりで、人員を回すことはできなかったのかと疑問が残った。一人一人の超人的な頑張りや使命感に頼るのではなく、行政と医療の連携による仕組み作りを切に願う。今後、介護施設でのクラスター発生は、全国でも起こる可能性が高いと思うので、今回明らかになった課題が正しく今後にかきされるように全国放送をしてほしい。

- 番組は施設職員やあのかた施設にいた人たちの悲しい出来事を冷静に表現していた。施設の現場の想像を絶する悲惨さ、札幌市の他人事のような対応も視聴者に分かりやすく伝えていた。命の選別がこの日本で簡単に起こりえることを冷静に語っており、非常に意義深い番組だった。今回のことは、クラスター発生時にさまざまな機関や施設に共通して起こりえる出来事だったのではないかと思う。“ウィズコロナ”の中でどういう行動をしていけばいいのかという結論を、番組の最後に示してほしかった。公共放送を担うNHKの役割として、取材した中で得られた事実を理路整然と発信することで、視聴者が自ら判断できるような情報をこれからも提供し続けてほしい。

(NHK側)

茨戸アカシアハイツでは8割以上の介護士が濃厚接触者とされており、運営法人が経営するほかの施設から看護師や介護士に応援で入ってもらったとしても厳しい状況だった。介護統括の鈴木さんの頑張りや美談で終わらせてはいけない問題なので、次にどこかの施設で集団感染が起きたときには、いち早く支援の態勢を作ることが必要だと感じ、それを番組で伝えたかった。NHKの役割として、事実を冷静かつ性格に伝えるということに徹したつもりである。

(NHK側)

新型コロナウイルスについては、さまざまな報道番組で情報を届けるようしている。茨戸アカシアハイツで発生した集団感染を中心に検証を番組で行ったが、新型コロナウイルスについてはまだ不明な点が多いとしても、番組のメッセージは視聴者には伝わったのではないかと感じる。検証番組で非常に大事なものは、データと、説得力がある証言である。取材先との信頼関係がしっかり築けていたからこそ深いインタビューが可能となり、大勢の

方の声をきちんと集めることができた。公共メディアとしての役割を果たせたと考えている。

<放送番組一般について>

- 6月19日(金)の北海道道「ヒグマに襲われないために～過去10年の事故調査が教えること～」を見た。北海道に住むうえではとても重要なテーマである。遭遇することはとても危険なものであるということを印象づける映像や話があれば、ヒグマに対する危険性をもっと深く伝えることができたのではないか。
- ヒグマの生息地に入るときは熊よけの鈴や熊よけスプレーなどは携行していると思うが、目の前にヒグマが現れた場合に大声を出しながら視線をそらさずにゆっくりと後ろに下がるという行動が実際にできるのかどうか不安に思った。また、開発がヒグマの生息地を侵しており、ヒグマが生息地から街に近づいている。その両方が現状を招いているのだと考えさせられた。
- ヒグマによる事故は一部の山奥だけではなく、市街地でも十分に起こりうる問題なので、こういう特集はとてもよかった。全体的に分かりやすく構成されており興味深かったが、北海道民も分かっていないヒグマによる事故を伝えるという前提の割には物足りなさも感じた。近年ヒグマに襲われた人の体験談を紹介していたが、もっとほかの事例も具体的に紹介してほしい。

(NHK側)

ヒグマによる凄惨な事件は歴史上たくさんあるが、例年よりも早めにヒグマによる事故が起き始めたため、そういう危険があったということを優先して今回は近々に起こった事故を扱った。ヒグマが人間にとっては危険な生き物であるということが伝わるように、今後も注意していきたい。

- 7月3日(金)の北海道道「コロナウィルス禍 あるライブバーの闘い」を見た。札幌市の繁華街にあるライブバーを取り上げた番組で、所属しているバンドメンバーの1人が感染したということをSNSで公表し休業していた。店の安全対策という点で、最初にそのメンバーがどこで新型コロナウイルスに感染したのか、番組の中で検証をしなければならなかったのではないか。営業を再開して演奏したいという経営者の気持ちは分かるが、再開後の対策も含め感染予防対策が甘いという印象を受けた。

- 新型コロナウイルスの影響を最も受けたのが、こうした公演をなりわいとする人たちだと思う。インターネットでの配信にまで目を向けていかなければいけない状況で、本来自分のやりたいことができないという切なさがしっかり出ていた。
- 休業を余儀なくされる中で、生演奏にこだわった店の存続に奮闘している様子がよく伝わった。ライブバーの経営者の苦悩から、臨場感を味わうことと安全性の確保の両立は非常に難しい問題だと感じた。演奏家でもある経営者のスタジオでの生演奏は、押し込められた感情を表現する効果的な演出だったのではないかと。MCの鈴木貴之さんが北海道ライブ・エンタテインメント連絡協議会の対応について触れていたが、演劇人としての鈴木さんの思いももう少し聞きたかった。
- 視聴者の中には、新型コロナウイルスに感染する可能性が高い場所として「ライブバーは怖い」という印象を持っている人もいると思うので、経営者がどのように今後の対策を練っているのかを特集したのはよかった。営業再開後も客席を32席から5席へと大きく減らしており、インターネット配信の収益も含め、経営は大丈夫なのか大変心配に思った。
- 全国的にライブハウスやライブバーで感染者やクラスターが出ているのは情報として聞いていたが、それで生計を立てている人たちがどのような苦勞をしているのか、全く分からない状況だったので、今回の番組でそうした店がどのような模索をしているのかがわかってよかった。経営者は休業中にも従業員に給料を支払おうとしており、決して簡単なことではないだろうが、ライブバーという店のあり方を愛して続けたいという思いがとても感じられた。札幌市は感染者数が北海道内でも多いことから、こういった取材対象となる店舗は数多くあると思う。そうした方々を取材し、記録していくことはNHKでなければなかなかできないことではないかと思うので期待している。
- 今までどおりの営業ができない中、悩みながら営業再開を迎えるライブバーの経営者の等身大の姿が映されていた。その姿をととても身近に感じて、好感を持って見ることができた。手探りで対策は、はっきり言ってまだ足りない部分もあるのではないかと疑問も残ったが、現在の現場のありのままの姿を見せてもらったことで考えるきっかけになった。生演奏やライブバーで演奏している様子も多めに紹介されており、ライブバーの魅力が伝わってくる内容になっていてよかった。

(NHK側)

3月にライブバーのメンバーに感染が疑われる症状が出て、陽性であることが判明する前から店名を公表して休業に入っていた。個々の店舗がどういう対策をとるべきかというのがなかなか分からない時期に、とても誠実に対応していると感じ、取材させていただいた。その後、再開するにあたり対策が十分かどうかは放送後にもいろいろな意見があった。だが、個々の店舗で行う対策のひとつの例として、検討材料にしてもらえるとこの意義はあると考えている。

- 7月10日(金)の北海道道「シゲチャン・ワールドへようこそ！」を見た。「シゲチャン」こと造形作家の大西重成さんが若いころにハービー・ハンコックのレコードジャケットを描いたと紹介されていたが、それだけの紹介では、視聴者はどういう人なのか分かりづらかったのではないかと。しかし、番組終盤に津別町で名物のクマヤキの焼き型をデザインしたり、町おこしのイラストなどに関わったりしている様子が描かれており驚いた。そのことを先に伝えたほうが大西さんのすごさが分かりやすかったのではないかと。
- シゲチャンが北海道ならではの作品作りに情熱を捧げ生き生きとアート活動を続ける姿に元気づけられた人も多いのではないかと。そして、廃品にもう一度命を与えて「供養したい」という大西さんの考えは、地球規模の課題である持続可能な社会の実現にも通じるもので、多くの人に共感されたのではないかと。アートで町を活気づけたいという大西さんが、アートを通じていろいろな人と関わりながら町作りに参加しているのが印象的だった。北海道の大地や自然が人に与えるインパクトの大きさが感じられ、北海道にしかない自然の恩恵を再確認できる内容だった。
- 人物とアートが絡み、いつもとは違った視点で見ることができ、北海道にはまだまだ面白い人がたくさんいるのだなと楽しくなった。流木や廃品を活用して作品を創作することを供養だと言っていたが、供養というより新しい命を吹き込んでいた。シゲチャンが若者と一緒にゲストハウスのロゴ制作や内装に取り組む場面も印象的で、若くして町を出たシゲチャンが自然に自分のふるさとに受け入れられて頼られているのは、飾らない性格によるものだと感じた。アイヌ文化への造詣の深さというのも北海道ならではのと思った。番組の最後に目標を聞かれていたが、「全くない」というコメントで締めくくられており、本当にさすがしく印象的だった。
- シゲチャンがなぜ東京を離れて津別町に戻ってきたのか、そこをもう少し掘り下げ

てほしかった。地元である津別町の町おこしをシゲチャンが助けているのか、それともシゲチャンもこの町に助けられているのだろうかなどさまざまな疑問が浮かんできたが、そこにあえて答えを出さないという番組の作り方にもとても好感が持てた。スタジオでのやり取りでは、鈴井さんの個性もシゲチャンの人柄をよく伝えていて、すばらしい相乗効果が生まれていた。「北海道道」の方向性が感じられる番組だった。

○ 6月13日(土)の「駅・空港・街角ピアノ スペシャル」(BS1 後7:00~8:50)を見た。世界中の名もなき演奏者たちの一人一人の人生にドラマがあったり、見知らぬ人どうしが音楽を通じて心を通わせる姿を見ているうちに自然に感動に浸ることができる。最後にロンドンの街角で奏でる91歳の老紳士が、ピアノで人々に喜びを与えられたことを「幸運な人生だった」と語っていたが、この番組のメッセージそのものではないかと感じた。

○ 6月27日(土)のNHKスペシャル「新型コロナウイルス 危機は繰り返されるのか」を見た。ドイツでは経済との兼ね合いを考えたくて、実効再生産数(R_t)の最適値はどこかということ感染症の専門家と経済学者とが連携して考えていた。ドイツではいろいろと工夫して数値を出したということが分かったが、日本ではどうだったのか。なぜ日本はドイツよりも高い数値を国民に示して、人と人との接触をより強く制限するように要請したのか。ドイツの例を示すだけではなくて、日本はどうだったかということを知りたかった。そして、スタジオゲストの大学教授の意見が言い訳のように聞こえたので、別分野の有識者などの意見も示されたほうがより理解しやすかったのではないかという印象を受けた。

○ 6月28日(日)のBS1スペシャル「医療崩壊～イタリア・感染爆発の果てに～」を見た。番組では、医師が実際に命の選別をする基準を作り、その基準にのっとって治療する人としらない人を決めている場面を放送していた。その基準を作った医師や、現場でそれに従って仕事をしたほかの医師や看護師たちに丁寧にインタビューをしながら、どのようなことが起きていて、どのようなことに苦しんだかを克明に記録していて強い衝撃を受けた。

6月28日(日)のBS1スペシャル「イタリア コドーニョの88日～封鎖・人々はこう生き抜いた～」を見た。封鎖の中で人々はこのように生き抜いたという内容で、かなりたくさんの方々の一般の人々にインタビューしていて、自分の身近にいる人が亡くなったときの様子や、亡くなったときの扱いがどういうものだったかを語っているのがとても印象的だった。短時間でイタリアの小さな町に入って、このようなインタビューがメインで構成されている番組を作る制作者がどのような人なのかにも関心を持った。

- 「九州の大雨関連のニュース」について。「これまでに経験したことのない大雨」という表現があるが、一体誰にとって「これまで経験したことのない大雨」なのか。気象庁の用語だとすれば、NHKでは何か別な表現の方法はないのだろうか。

(NHK側)

気象庁の用語としてこういう表現になっており、大雨が懸念される状況で最大級の警戒を呼びかけるときに、NHKでも気象庁の発表のとおり使っている。それを補足するような説明のしかたも引き続き検討していきたい。

NHK札幌拠点放送局
番組審議会事務局